2000年

戦時体験記録集（第七集）

戦争体験を語り継ぐ会

平成十三年
第七回戦争体験を語り継ぐ集い

目次

発刊のことば・・・

◇発刊のことば◇

コンピューターの「二〇〇〇年問題」を抱えて明けた今年も早や半年が過ぎ、夏がやって来ました。

本記録集の刊行のため、今春原稿の応募を呼びかけましたところ、大勢の方より貴重な体験談をお寄せいただきましてありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

八月十五日には五十五回目の終戦記念日を迎えます。十五年の長きに及んだ戦争を体験した世代は最年少層でも六十歳を越えました。

この先、戦争体験談を直接語り継ぐことは年々困難となります。いま記憶の定かな間に次世代へどうしても語り継いでおく必要があります。

小誌もその一つとしての使命を持っております。来年から始まる二十一世紀以降こそ確約された平和が続くことを念じつつ。

一本の羊羹（ようかん）

石河孝益（いしこ たかえ）

幼い頃、田舎の生家では冠婚葬祭に、必ず、当家の「およばれ」が盛大にあった。「子ども膳」に向う縁者の子どもたちはわくわくして列席した。普段は、めったに食べられないお豆腐の汁物と旬の素材をつかった味御飯が大好きである。

どの家でも飼っていた鶏一羽も、この日の料理に使われた。帰りに、手の平ほどの御饅頭（おまんじゅう）も頂く。帰宅するなり、総勢六人家族では六等分することになる。甘い物＝御菓子といえば、こんな時だけなのだ。一口ほどのそれを、少しずつ大切に食べた。

昭和三十二年春、就職したとき、『羊羹（ようかん）一本、一人で食べてみたい』が夢だった。初任給八千円である。百円はする羊羹（ようかん）を買うには、大変勇気が要るも

のの、名鉄百貨店で買う。

二階の自室で秘かに食べ始めたが、厚みも巾もある大きな一本を全部は、とてつもない量なのだ。半分ほどを五等分して、家族にだした。本意とちがって、私の誠心とうけとられ、皆、喜んで食べていた。私は、苦い胃液と胸やけで、眠れない一夜を過ごすことになる。

この事以来、給料日は、貯金もしたが、美味しい御菓子を家族の土産とした。羊羹だけはやめたが数年後、塩尻駅の塩羊羹に出会う。量も少なく、手頃な塩味をともなった甘味が、心良く、美味だった。

今どきの孫たちは、チョコレートやキャンディを、祖父母にねだっている。虫歯を恐れて、自宅で買ってもらえないからだろうか。多様化した御菓子に恵れている現代っ子には想像もできない笑話である。

昭和四十年代以後、学校で、街角で肥満児が増えた。飽食時代の現代病の一つだろう。

私の戦時体験

佐藤貞雄

私は昭和十七年に名古屋市立中ノ町国民学校に入学しました。前年の十二月に大東亜戦争（第二次世界大戦）に突入していました。入学当時は日本も優勢でしたが、徐々に旗色も悪くなり、二年の時には都市部から地方への疎開が始まりました。

私は海部郡の蟹江町に父の田舎がありましたので疎開しました。其処での体験になります。

四年生の春、学校で定期身体検査が行われ、戦時中のこととて私たちは隣の市の津島市まで検査を受けに行きました。当時の服装は男子は防空頭巾を肩から下げ、もう一方の肩からは水筒を下げていて足元は藁草履であった。女子はもんぺい姿であった。私たちが二列縦隊で田圃の畦道（たんぼの中の道）を歩いている時、上空にアメリカ軍のグラマン戦闘機が、名古屋を襲撃した帰り

だと思われるが、編隊を組んで飛んできました。其の内の一機が私たちの隊列を見つけたのでしょう、急降下をしてきて威嚇（脅すこと）しました。全員が慌てて防空頭巾を被り、畦道の横の斜面に伏せて飛行機の通り過ぎるのを待ちました。二回から三回低空で飛んだのでしょうか、私が恐る恐る飛行機を見上げたとき、戦闘機の兵隊の笑っている顔が見えました。瞬間殺されると思わず目を閉じました。

次の体験は名古屋が空襲を受けたときです。先にも述べましたように、私は当時蟹江町に疎開していました。夜、名古屋がB二九から空襲を受けます。空襲警報が鳴り、避難して名古屋の方を見ると探照灯（遠距離を照らす明かり）の光が二本三本とB二九を捕捉（捕まえる）しているのですが、残念ながら日本軍の高射砲（空に向けた大砲）では高さが届きません。飛行機のはるか下で弾が炸裂していました。更に悔しかったのは、日本空軍の戦闘機では歯が立たずに迎え撃つ事も無く、何処かへ飛んで行ってしまったことです。そ

れ程の高度から爆弾やら焼夷弾（落ちると燃える爆弾）を落としていったのです。すると程なく、名古屋の彼方此方から火の手が上がってきたのです。其の明るさは、蟹江で見ている私たちの隣の人がはっきり分かる位の明るさでした。其の燃える様子は、到底此の世のものとは思えないような凄惨な光景でした。夜が明けて、学校に行く途中の田圃には、狙いが反れた焼夷弾の不発弾が転がっており、無気味な姿を見ることがありました。

最後に、空襲が激しくなり蟹江にも焼夷弾が落とされるようになりました。焼夷弾からの被災を逃れるには砂袋が有効であるとして、私たち四年生全員が手作りの袋を背負って、蟹江から下の一色の庄内川まで歩いて砂を取りに行きました。袋一杯に砂を入れて背負って帰り、学校で全員が持ち寄った砂を入れて投げられる位の紙袋に入れるのです。

戦後の生活体験として情けない思いとして心に残っているのを記します。蟹江町の隣に舟入と言う町があります。町の中を国道一号線が縦断しています。

私の母の実家が、其の国道と蟹江川の交わる角にありました。ある日、国道上が騒がしいので何かと思って見ると、進駐軍（当時アメリカ軍をそう呼んでいた）が、軍用トラックを連ねて東から西に移動中の事です。兵隊達は軍用トラックの上から、国道の側に立っている子供たちに向かって、チョコレートやらチューインガム・煙草等をばら撒いているのです。子供たちは後から後から車が続いて走っているのに、怖さを忘れて放かられた菓子を拾うのに、無我夢中でした。それを見て兵隊達は指をさしながら、大きな声で笑って走り去ったのです。このことは子供心にも悔しい思いとして残っています。

艦砲射撃を受けた経験

一九二五年生まれの男　下村康雄

浜松高等工業（現静岡大工学部）二年の夏のこと（S二〇・七・二九）それまでに三〇数回の空襲を受けた浜松は廃墟となっていた。学生とは名ばかりで私達も動員（戦争中に皆の力を国のために出し合うこと）中であった。

中島飛行機の武蔵工場が被爆して、残った工作機械を疎開先として、新居町（弁天島の西）のクレハ紡跡地に工場が移された。そこが私の動員先で、その後研究要員として約一割の学生が学校に戻され、私もその一員となり学業に励む筈であった。しかし、五月の空襲で教室は勿論、校舎そのものも無くなってしまった為、再び動員先に舞い戻ることとなった。当時は中学生すら動員されている状況で一層深刻さを増して居た。その中学生（五年制の三年生）に工

業的な基礎知識を教育する任務に就き、旧制掛川中学の担当になった。もう一人私と同様な任務に就いた学友Fは、掛川の女学校を担当した。二人で掛川の町はずれの神主さんの家に下宿し、夫々中学と女学校へ勤務？する毎日となった。（勿論、中学も女学校も共に多くの教室が工場化され、航空機のエンジンの一部の歯車を作っていた。）

この土地は田舎故空襲警報も少なく、正直な所ホットした一時期であった。

私は入学当初から浜松市内の学校に隣接した寮に居た。そして、本校舎は焼夷弾爆撃で灰燼となるも、寮の建物は寮生の懸命な消火作業により燃えずに残っていた。その寮に旧型な消火ポンプがあったのだが、連夜の焼夷弾空襲に、フル稼働した為、ギヤーが摩滅破損していた。たまたま私は歯車工場に動員中故（前記の教員？と兼務）、何とか修理してくれと相談があった。非番の日に寮に出張し、ポンプを診断、歯車をスケッチ、寸法をとり、昼は教員、夜は休止中の一台のフライス盤で歯車を作った。ヤッと出来た歯車を持って再び

寮に出張し、消防ポンプを何とか修理、使える様にしたが、作業が終わった頃は夜になっていた。先輩達が今日は泊まって行け、スイカを御馳走するから、と言って下さり、私もその気になり明朝帰ることにしたのが、二〇年七月二九日夜のことであった。

焼け残りの寮で、夏のことでフトンは不要で蚊帳にくるまり、四方山話をしていたら急に半鐘が鳴りだした。（当時電気はなく、ましてやサイレン等は鳴らない状況）故、空襲と察知して、防空壕（爆弾から避難するための場所・主に地面に穴を掘った）にとび込む態勢をとる。しかし、何時もの空襲とは様子が異なり、三方原航空基地の飛行機か（当時空襲が始まると三方原の友軍機（味方の飛行機）は空中退避の為、低空を逃げ回っていた）ブンブンと音が聞こえる。併し、月あかりで（当日は満月に近く、月が明るく、時折スカシ見ることが出来た）よくよく見るとフロートのついた飛行機であった。するとこれは敵機としか考えられない……益々異常を感じていた時である。海の方

が稲光りの様にピカ、ピカ……と明るくなった。瞬間艦砲射撃と直感、壕の中に落ち込む様に逃げ込んだ。と同時に百雷が一時に落ちるが如き爆発音がゴウ、ゴウ……。壕は諸にゆれ生きた心地はなかった。狭い壕故、足と足、手と手が重なり合って居り、互いに相手がガタガタとふるえているのが良く分かったものだ。それまで何度も空襲に遭い、空襲で死ぬ様な人はよほど運が悪い位に思えていた頃ではあったが、この時ばかりはもうダメだと観念した。空襲なら敵機のエンジン音がしなくなったら一応終わりであるが、艦砲射撃はいつまで続くものか見当もつかない。

何十分か経った頃、一人がここから逃げようと言い出し、壕の蓋を開けようとしたが爆風と爆裂音の為、到底逃げることが出来るものでないことは明白故、その友の足をつかんで壕内に引きズリ込んだりした。

そのうちだんだん度胸が坐ってきて（死線を超えたと言うことか）これが最後故、皆夫々個人プレイをしよう、と言うことになり、震えるような声で

軍歌を歌ったりしていた。

そして一時間半もした頃か静けさが戻ってきて外に出てみたが何も見えない。おそらくは砂塵のセイであろう。見当をつけて北の方へ走りに走って逃げた。シラジラ夜が明け、寮の方へ戻って見た所、私達の壕の周囲はまるで蓮根の様にスリバチ形の砲弾の穴があいていた。又砲弾の破片も鋸歯（のこぎりの歯）の様な破裂面を持ち、小さいものから人間一人では持てない位の大きいものまで、壕の上の土にササっている状況で再度驚いた。又あたり一面砂塵が槇の葉（浜松地方は細葉と称して槇の生け垣が多い）のチギレたものと一〇cm位の層をなしていて、もとの地面はまったく見ることが出来なかった。

我にかえって掛川へ帰ることにし、浜松市街地（廃墟に近いが）をトボトボ一人で歩くと、何故か不発弾がゴロゴロしていた。不発弾は表面がピカピカ光り輝き、直径は五〇cmもあろうかと思えた。明らかに戦艦の主砲弾である。

浜松駅にたどりつくも、列車の来ないプラットホームとレールだけが空し

かった。

浜松から一刻も早く立ち去りたい気分と、動員先のことが気がかりで、東の方向目指して歩き始めた。天竜川の橋を渡っている時、高官の車であろうか砂ホコリを上げて来た車とスレ違ったのを覚えている。これが寮の壕以来始めてあった人であったが、会話も出来ず、アッと言う間に西の方へ馳り去って行った。

磐田にさしかかった頃は既に夕刻となっており、後輩達がやはり動員中でその宿舎にしていたお寺があるとの情報を耳にし、そこに転がり込んで一晩お世話になった。翌朝磐田駅から汽車が出るのを知り、ホウホウのテイで掛川に辿りついたのは七月三一日昼のことでした。

江田島（旧海軍兵学校）の寸描

田辺　博

沿　革

四季温暖な気候に恵まれて、風光明媚を謳う西日本の瀬戸内海。そこには大小二千にも及ぶ島嶼（大きな島小さな島）が点在し、間を縫って無数の船舶が後を絶たないほど往来する。

明治二十一年から昭和二十年の敗戦まで、六十七年の長きに亘り旧日本海軍（以下海軍）の兵科将校揺藍（揺りかご）の地となった江田島は、面積約三十平方粁、しまなみ海道で知られる芸予諸島の西方広島湾に浮かんでいる。

古来、四面を海で囲まれた島国日本の防衛には、周辺沿海の制海権確保による安全保障が不可欠であり、海軍の歴史はこの宿命のもとに綴られて来たものといえる。

明治三年、東京築地に海軍兵学寮が発足、同九年、兵学校と改称されたが、市井の喧噪（やかましい）と奢侈（ぜいたく）を嫌って呉鎮守府（海軍部隊の監督などをする機関）開設に先んじ、同二十一年、辺境の孤島に移された。

以来、敗戦による閉校まで、卒業生約二万六千名を送り出した本校赤レンガ造りの生徒館は、現在、海上自衛隊幹部候補生学校になっているが、明治二十六年の竣工から一世紀を越える日本の盛衰を見つめてきたのである。

太平洋戦争と兵学校

昭和史の初期にみる戦乱の歴史、所謂十五年戦争の破局は、昭和十六年暮の真珠湾奇襲に始まる太平洋戦争への突入であった。リメンバー・パール・ハーバーの声に全アメリカの激昂（すごい怒り）を買った悲劇の主、山本五十六長官をはじめ海軍部内には、遠からずの敗局を見据えた要人も少なくなかったが、今にしては返す由もなく痛恨の極みである。

人間育成を重視した海軍上層部は、戦時に於いても多数の生徒を採用した。

（私たち最終七十七期は三千七百名に達した。）

何故そんなに大勢を――私はつい先頃まで「戦局挽回への特別攻撃要員補充」を最大理由と考えていたが、近刊で元教官の話を拝読し、これを改めたいと思う。即ち、

一、空襲の激化に伴い、軍関係以外では十分な青少年教育が難しいので、より多くの人材に安全な勉強の場を与える。

二、精神教育を重んじ、後日広い分野でリーダーとして活躍し得る素地を作る。

三、基礎的な学業、特に英語は将来対策の重要な一環として授業時間を減じない。

熾烈（激しい）な戦火の中にあって、夙に（ずっと以前から）敗戦後の日本を思量して百年の展望が計られていたことは、敢えて特筆すべき卓見（大変優れた考えや意見）であった。

志願から入校まで

昭和十八年、神奈川S中学三年に進み将来の路を選ぶことになった。工場勤務の父は、工科系へと考えていたようだが、戦時下でもあり国の為実力で飛び込める男の世界にと、陸士（陸軍士官学校）と海兵（海軍兵学校）の願書を同時に提出した。

登校日のほかは、農家の応援や、工場動員を勤めながら、懸命に受験を目指していたが、翌十九年中学四年生の春、日頃頑健な父が一夜の高熱に倒れたまま帰らぬ人となった。

幼な児の妹を抱えて、悲嘆に沈む母と共に涙しつつも、少年の志望は頑なに変わらず、今に残る悔悟の道を歩んで行った。

陸士を諦めて海兵に絞った七月の学科試験は、横須賀の海軍工機学校で四日間連続して行われ、基準点に達しないと翌日失格という苛酷な方式であった。午後の発表まで待機の時を過ごした「三笠」艦上の期待と不安は、まこと耐え

難い苦行で今も胸痛む思い出である。

秋の半ば、父が勤務していた海軍工廠（軍関係の工場）で働いていた母の許に採用電報が届いたが、動員先の電話口では唯泣きじゃくった。

翌二十年四月二日、日の丸の小旗に送られて平塚駅頭を離れた後、八日の渡島までの数日を広島市内の海軍中佐の御宅でお世話になった。同行した級友のご親戚で、勿体ない激励と歓待を頂いたが、無念にも原爆爆心地に近く、ご家族方の優しいお姿を再び拝する日はなかった。ご恩返しも叶わぬまま、幾たびか巡り来る御命日には、痛恨の合掌を重ねるばかりである。

生徒数の急増に伴い、山口県岩國、大原（島内）に造られた分校のうち、私は大原四部九分隊に配属され、十日、全員が本校大講堂に集合して厳粛な入校式に参列した。

今や刀折れ矢盡きて、進むに艦無く航空機も僅かという満身創痍（全身傷だらけ）の連合艦隊であったが、護国の任を誰か負うの気概に燃えて、純真

な少年の血が躍ったことを憶えている。

教育と訓練

瀬戸の潮風に桜吹雪が舞い散る中、私たちの入校教育が始まった。（生徒は一分隊に三期合同で編成され、新入生は三号、一期先輩を二号、二期先輩を一号と呼称した）

大原分校の発足は、昭和十二年、島の北岸地区に二十万坪の用地が確保され、十九年五月から突貫工事が進められたと聞く。

激しい荒道場の修行は、予ねて覚悟の上であったが、入校式当夜の「姓名申告」には度肝を抜かれた。出身中学と氏名を力一杯の大声で一号生徒に申告するのだが、何遍となく「聞こえん」の怒声が飛び鉄拳〔げんこつ〕の嵐が舞った。

「殴り殴られ偉くなる」の伝統行事は、その後も日夜止むことなく続けられたのである。

不幸にして三号十三名の先任を拝命した私は、連帯責任の配分も合わせてタップリと恩恵に浴したが、不思議にも上級生を恨む気持ちは少しも起こらなかった。この鉄拳制裁については「効薄い蛮習」との見方があり、戦後も久しく論議を醸したが、賛否中庸〔中間〕夫々に理あり躾教育の難しさを痛感させられる。

新参の三号には、夥しい〔非常に多い〕隊の公務が課せられており、ほっと安らぐのは厠〔トイレ〕の別荘と、眠りついた夢路の中だけであった。

学習の時間は、疲れ果てて精神を集中できず屡々睡魔に悩まされた。激しい訓練では、小銃を捧げての匍匐前進〔腹這いになって進むこと〕、海軍体操、水練では幾度か胸を打って失神寸前に、太い櫂が自由にならず息絶え絶えのカッター遠漕〔遠くまで船を漕いでいく〕など、血の滲むような苦闘が続いた。

目まぐるしい日課の連続であったが、碇泊中の重巡「利根」を訪ねた波静

かな江田湾、島一周の「八雲」乗艦実習で揺られたハンモックの夢、津久茂山上に松籟（松風の吹く音）を聴く樹影の憩いなど心和んだひとときが懐かしく瞼に浮かぶ。

消灯ラッパが鳴り終わると、真っ暗なベッドで毛布にくるまったまま寝言と称する無礼講の問答を。「どうして兵学校へ来たのか」「ハイ、好きな女学生に薦められて」人想う年頃の本音も聞かれる若い集団であった。

津久茂山麓

入校教育が終わった五月初め、家郷への音信（検閲のためハガキに限定）が許された。

デスクに置かれた一通の封書、押し戴いて辿る母の筆あとに熱い涙が散る。二日、母宛ての第一信を紙片に書き写す。以来、八月十二日の絶信まで恩師友人を含めた四十六葉を記し一冊とした。胸ポケットに秘めて持ち帰った豆手帳は、遠い青春の形見として色褪せた今も座右（身近か）に置く。

分校の西に在る津久茂山は、夏の木立から望む青い海が美しかったが、敵機の来襲に備えて其の中腹に防空壕（地下校舎の構想とも云われた）の造成が開始され、生徒も馴れぬ鶴嘴を振るって堅岩に挑んだ。

タコツボ作戦と称して、単独壕に潜み爆雷を背負って、敵戦車の下に躍りこむ悲壮な訓練が行われたのもこの頃である。

沖縄が敵の手中に帰し、本土決戦が必至になると、近接する生徒館の延焼を防ぐ為、八棟の内半数の間引き解体工事が命ぜられ、教官指揮のもと作業に当たったが、流石に疲労の色濃く重い悲壮感が漂い始めていた。

原爆の投下

七月に入ると、全国の都市の殆どが焼失し、呉軍港の周辺にも艦載機（船に載せて運ぶ戦闘機）が頻繁に飛来しては、度々機銃掃射（低空飛行の戦闘機から機関銃で撃つこと）の洗礼を受けた。近海の残存艦艇は悉く沈没し、愛する「利根」は津久茂岬沖に大破着底して動かなかった。

八月六日、朝の自習室に青白い光が一閃、間もなく生徒館を揺るがす大爆風が襲来した。

退避ラッパが鳴り響き、小銃を肩に壕に向かって走る。右手遥か広島の上空には赤黒い不気味な炎雲、「弾薬庫の爆発か」誰かが大声で叫ぶ。警報が解かれて北を望めば、この世の終焉（終わり）を思わせる魔の焔が天に冲（高く上がる）していた。

夕刻、技術教官から訓示、新型爆弾の白熱光線を遮るべく白布が支給され、各自覚束ない手付きで目出し帽を縫う。翌日から警報の度にこれを被って走ったが、広い練兵場を数千の白頭巾が一斉に移動する様は、何とも異様な光景であった。当時、軍部では原子爆弾製造の研究が極秘裏に進められており、私たちはこの時すでに其の名を耳にしたのである。

敗戦と江田島離島

八月十五日正午、ポツダム宣言受諾の玉音放送（天皇の話）が全国に伝え

られて、日本の無条件降伏を知る。切歯扼腕（歯ぎしりし、手を握りしめるほどの悔しい思い）して悲憤（悲しみ憤る）遣る方も無く、唯茫然として言葉を失ったままであった。

明治以降、三代に亙る海軍の歴史は此処に其の幕を閉じ、軍事機密に関する書物は一切を焼却、生徒館は物々しい雰囲気に包まれたが、噂された暴動も幸い杞憂（余計な心配）に終わり、全校の秩序は整然と保たれていた。生徒は軍籍を解かれて各々の出身地に帰還を命ぜられた。

二十二日離島。母と妹が待つ初めての地、宮城県気仙沼在の疎開地に向け出発する。

白波の彼方に遠ざかる霊峰古鷹山（島の最高峰三九二米）を仰ぎながら、思いもよらぬ運命の変遷に熱い涙が頬を伝う。

崩れ落ちた広島駅を後に、上野から東北本線、彷徨（さまよい歩く）の旅が続く。焼けつくような無蓋車（屋根のない石炭を運ぶ貨車）で石炭の山に

埋もれ、真っ黒な顔で母の膝に縋ったのは二十七日の朝、私の小さな写真には野の花に香煙が揺らいで、奇しく〔不思議なこと〕も十七歳の誕生日を微笑むかのようであった。

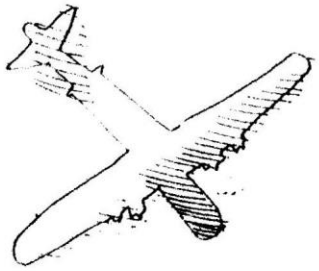
了

あとがき

私は、昭和三年八月、西枇杷島に生まれ七十一歳になる。

このたび「海軍兵学校の手記」を遠い日のかすかな記憶を辿りながら小文に綴らせてもらった。

僅か四ヵ月の短い生徒生活の一端であり、今も小室に掲げる教訓「五省」〔五つの反省〕を付記し、祖国の非常時に生きた一少年の姿を、少しでも皆さまにお伝えしたい。



五省

一、至誠に悖るなかりしか　〔真心に背くことはなかったか？〕

一、言行に恥ずるなかりしか　〔言動に恥ずかしいことはなかったか？〕

一、気力に缺くるなかりしか　〔気力は充分足りていたか？〕

一、努力に憾みなかりしか　〔努力が足りず残念ではなかったか？〕

一、不精に亘るなかりしか　〔最後まで一生懸命やったか？〕

弟よ

西山　葉和子

ライラックの花咲く空港で、私は目を閉じて心の中でつぶやいた。

――弟よ――

昭和二十年九月、満州から引き揚げの途中、弟はハルピンの日本人収容所で病死する。三歳であった。当時、四歳の私は、収容所便所の裏地に埋められたのは忘れられない。

敗戦の少し前、危機を察した両親は、私と弟を連れ、着のみ着のままで奉天（ほうてん）を脱出した。日本人集団と合流し、昼夜を問わず歩き続けた。疲れると、父は私をリュックの上に肩車し、母は弟を背負って這うように歩いた。群れから取り残されるのは死を意味していた。疲れ果てて、そのまま別れてきた人は何人もいたと、母は語るごとに目をうるませていた。野宿をしながら、ようやく駅にたどり着いた時、母と親しかった上村さんが、幼い自分の子四人を線路上に

並べて、

「おばあちゃんの方に向って、目をつぶり手を合わせなさい」

銃声が四発、夕焼けの空に四つの白煙が立った。上村さんは日頃、死んだおばあちゃんはあっちの空にいるんだよと、西の空を指して言っていたので、子どもたちは何んの抵抗もなく従ったようだ。

瞬間の出来事で止められなかった。と母は言っていたが、それを見せないように、咄嗟（とっさ）に私と弟を抱きしめたが、あまり多くない記憶のなかでも、鮮明に残っている事件である。

上村さん夫婦を責めたり、とがめる人はいなかった。皆、明日はわが身、生きて日本の土を踏める保障はない。せめて子どもだけでも生きのびてくれたら、と中国人に預けた人もかなりいた。

一部には、日本人が女の子を売りとばした、そんな噂（うわさ）が流れた。多くの中国人は、今まで一緒に暮した仲間じゃないか、途中でどうなるかも知れない。

それなら子どもだけでも助けてやりたい。優しい気持ちから引受けてくれたのである。

私も弟を、隣の王(わん)さんが可愛がってくれて、日本に帰っちゃいけない、ロシア兵がきたら、穴を掘って隠してあげるから置いて行くようにすすめられたが、両親は死ぬ時はいっしょにと連れてきたそうだ。

貨物列車にゆられ長い時間乗っていたのを憶えている。列車の中でオシッコがしたくなり、父に抱えてもらい、列車から外にさし出されるようにして済ませた。父がしっかり抱えてくれてはいたものの、手を離されたらどうしようかと身のすくむ思いをしたことを、私ははっきり憶えている。

成人の日、父にこのことを話したら、よく憶えていたなあと、当時を語ってくれた。

やっとの思いでハルピンの日本人収容所に着いたが、どこで知れたのか、父が警察官だったとの理由で連行された。別れる時、わずかなスキをのがさず、

母にピストルを手渡し、

「多分、生きて戻れない。もしもの時は、これを使いなさい」

この言葉を残して去っていった。

父が連行されて間もなく、私と弟は高熱をだし、好物のみかんの缶詰を少しずつ食べ、明日食べようねと、残しておいた翌朝、弟は冷たくなっていた。あの時、全部食べさせてやればと、母はいつまでも悔んでいた。

しばらく経って、父が戻ってきた。警察官ではなかったと認められたからだ。父は病院に勤めていたと主張し、それなら注射をうって見ろと言われたが、病弱な母によく打っていたので難なくやってのけたそうだ。

両親は、形見として切り取った弟のわずかな髪を手にして

「坊やが生きていたら」

涙していたのを私は忘れられない。

いつか満州へ行きたい。その願いも叶(かな)わないまま、両親は他界した。母の

歳を越えた私は、夫と四人の子どもを説得し、二ヵ月の中国語の特訓をうけ、ハルピン、瀋陽（奉天）、撫順、大連を旅した。

幸い現地案内の人が、ハルピンの日本人収容所を探してくれて、一握りの砂を拾うことができ、帰国後これを墓に収めた。

記憶の薄い思い出を求めた旅は、一かけらの過去を見つけてくれたのである。

コラッ！珍念、居眠りしてはいかんぞ！

橋詰　四郎

今年の正月、百五十通ほどの年賀状を戴きました。祝賀印刷文字の余白にちょっと添書があると格別です。福岡市の福永からの年賀状に、表題の添書があり、私は、そうだこの人にも助けて貰ったのだと、当時を思い出しました。

日本の降伏は昭和二十年八月十五日です。私は八月九日から二十一日まで、ソ連の強力な戦車軍団と死闘を繰り返していました。

（ビデオでアメリカ映画プライベート・ライアンを見てください。戦車と歩兵の戦闘場面はその通りです。）

捕虜になると家族へも類が及ぶので、捕虜にはなるかと逃げました。私が生きているのは、戦争で殺しにきた人を私が先に殺したからです。これは逃げている時も同じです。日中は隠れ、夜を待って逃げていました。

山の中に隠れていると、下の道を大勢の日本兵がソ連兵に連れられて行くの

です。私はあれだけ大勢なら、殺されずに日本に帰れると思い、隙を見て夜、野宿の仲間に潜り込みました。この兵隊達は戦争をせず捕虜になったので、私もソ連兵を殺していない仲間になりきり、シベリアへ連れて行かれました。

皆さんは「ノルマ」と言う言葉を何気なく使っていると思います。ノルマとは、達成しなければならない到達目標です。ソ連の戦後復興にシベリアへ連行された、六十万人の日本兵を苦しめたロシア語です。日本中に広まるほど大勢の日本人が、シベリアへ連れて行かれ、ソ連兵の銃口に狙われながら、酷寒・飢餓・重労働・疫病で働きながら何万人もの日本人が、ノルマを呪い死んでゆきました。死ぬと通夜も葬儀もできず、全裸で小屋に積み、トラック一台分になると何処かへ運んでいきました。

シベリアで一年ぐらいしてから、ノルマ高位者から順に日本の家族へ手紙を出せるようになりました。文字は仮名、誰といるか、何処にいるか、なにをしているかは書けません。欲しいものがあったら書きなさい、送ってきたら渡し

ます。と言うのです。ハガキを貰った人は大喜び、

「尊父スターリン大元帥様の暖かい心づかいで、何不自由なく快適に暮らしていますからご安心ください。毛糸のセーターとズボン下、腹巻に、餅、砂糖、小豆、塩、スルメ、鰹節、歯磨、タオル、パンツ、石鹸。なんでも送って下さい。ソ同盟万歳。スターリン大元帥陛下万歳。」

誰が決めたかは知りませんが、このような手紙を書いていました。私は日本からの小包みが来ても帰れないと、小声で言ったのが密告され、アクチブに吊し上げの人民裁判にかけられました。（アクチブ＝共産党に転向した日本兵）最初に書いた人が日本からの小包みを待つ頃、私もハガキが貰え、「キョウアメ。アスハレ」とだけ書きました。これを読んだ福永が禅坊主のような文句だと言って、私を「珍念」と呼ぶようになりました。

シベリアで私の労働は、旋盤で鋲を種類別に決められた太さに削るのです。この鋲は蒸気機関車のボイラー組立用です。勤務は、日勤・準夜勤・深夜勤、

八時間交代で、一昼夜一台の旋盤をロシア人二人と私との三人が一週間の循環で使い、ロシア人と同じノルマが課せられていました。日勤以外のノルマは監督が昼間「これをやれ」と鋲を山積みにしておきます。

準夜勤のとき、ボイラー組が自分に必要な鋲を削れと言ってきました。ボイラー組は二人一組のロシア人と捕虜がペアを組み、二人が協力して苛酷なノルマを達成しているのです。このロシア人はロシア人からも嫌われている札付きの性悪で、相棒の捕虜を大切にしない嫌われ者で有名でした。引地（捕虜の名）は橋詰頼む俺を休ませてくれ。と、弱々しく言うのです。

そこで私は申し出を無視しました。奴の声が次第に大きくなり、ロシア人が持ち場を離れ集まってきました。ロシア人がノルマゼロになれば大変なことになるから、この成りゆきに関心を持って見にきたのです。ノルマと死なない程度にしか食物を配給しない国ですから、娯楽も楽しみもありません。それにこれはノルマ事件ですから他人事ではないのです。

（※日本も食料「米」の配給が二ヵ月もなく大勢餓死者が出た時代です。）

奴は集まったロシア人へも同意を求めましたが、皆両手を少し持ち上げ、同意を拒否するしぐさを無言で示しました。

奴は烈火のごとく怒り私を脅迫しはじめました。私は奴を睨み「俺は、俺の監督の命じたノルマを達成するから邪魔をするな。」見物からウオーと私を応援する歓声があがりました。奴は「俺が監督だ。」と怒鳴ったのです。ノルマゼロだから必死です。私は素早く「ブローウシュ、ガマンジェルネイト、ヤー、ウチベヤ、アジンナカバ、ラボーチー、イジナーホイ」

（この嘘つき野郎なにが監督だ、お前も俺も同じ労働者だ、五月蠅い（五月の蠅は活発に動きうるさいことからできた言葉）何処かへ行ってしまえ。）

奴は、ヨッポイマーチと叫び、持っていたハンマーで撲りつけてきました。私はスパナで防ぎ、関東軍歩兵で習得した必殺短剣術で反撃。奴の額から血が出ました。血を見て私は『アッ銃殺刑』だと直感しました。奴は逃げ、野

次馬のロシア人は私を取り巻き「よくぞやったぞ。」と、肩を叩く者もいました。奴は逃げたのでなくソ連兵を連れてきて、私は逮捕されました。

逮捕されるとき、見物のロシア人がソ連兵に、成り行きを説明し、奴が私に「ヨッポイマーチ」と言ったことを証言してくれました。

（ヨッポイマーチ＝最悪の屈辱語で使用禁止語。喧嘩で使うと、使った方が負けになる言葉。このような屈辱語は日本にないから、日本語にはしない。）

銃殺覚悟の私は間接死の**営倉刑**（兵舎内の建物に閉じこめる罰）、暖房はなく冷凍死の墓場です。眠ると凍死するので座らず、足踏みと柱に頭をぶつけ睡魔と闘っていると、外側を激しく叩き「コラッ！珍念！寝るなよ。」と、福永が一晩に何回も大声で外から励ましてくれたのです。私は営倉から奇跡の生還をしました。出てみると私は、ロシア人からも日本人からも英雄にされたり、無法者にされていました。一番喜んだのは引地で、相棒のロシア人は何処かへ連れていかれ、二度目の相棒は良い人だと喜んでいました。引地はノルマ百％。

ハラショラボーター＝優秀な労働者に変身、食べ物の量も多いグループに仲間入りしていきました。

虜二句　　四郎

万物は凍てて二度目の冬も生く

霏々と九月囚われの雪舞い始む　　四郎

霏々（雪が降ってくる様子）

女の私に戦後はない

話した人　並田カレ子（仮名）
聞いた人　橋詰　四郎

男の戦争の話は手柄話や自慢話で聞きたくない。男が始めた戦争で本当に苦しんだのは女や子どもや、だから女の話を聞きたいと言う人がいると聞いてここ（宝塚）へ来たのよ。満州と聞くだけで懐かしいよ。そう、兵隊だったの、シベリアまで行ってよく帰ってきたね。シベリアで死んだ人は見向きもされないと聞いているわよ、犬死扱いでは浮かばれないよね。あら、お酌をしてくれるの、飲まして話させようって魂胆かい。心配いらないよ、あんたの人柄を聞いて、話そうと腹を決めて来たんだから、私に気を使うのはよしておくれ。私は手酌でやるから、あんたは、しっかり聞いて伝えておくれよ。

私の苦労話？。みんな苦労したんだから。若いときはみんなに騒がれたもんだよ。みんなと言う意味判るかい、みんなにだよ。みーんーな……。

あの頃は嫌だったね。死ぬ勇気もないくせに、生きているのが嫌でね。女に生まれたのを呪ったよ。兵隊さんみたいにパーッと死ねたらいいなあって……。あんた私の目を見てごらん。そうそう、あんたは私のこと判ってくれそうだね、私の杯受けなよ。なに、飲めないって、大丈夫あんたを酔わそうとは思わないから。

私はね、奈良県の貧乏百姓の三女でね。小作（土地を借りて農業をしている人）の父は戦死よ、『軍国の家』『軍国の妻』とお母さんは言われていたけど貧しくてね、親孝行ができると十六の時、僅かな前借で大阪の色街へ女中奉公に行くのよ。男手のない小作百姓は大変よ。お母さんから済まないがお金を送ってくれと手紙がくると、親孝行をしなくちゃと思い、前借でお金を送って商売女、今、みんなが騒いでいる従軍慰安婦（軍隊と一緒に戦地へ行き兵隊を慰める人）になっちゃったのよ。

最初は大連、あんたも私のお客だったのかも知れないよ。なに、大連には

居なかった、嬉しいね。あの頃、芸者が四円。私達は二円だった。芸者だって男相手の商売、私達とチョボチョボよ。軍の命令で検診が定期的にあるのよ。検診にひっかかると商売ができないし、借金が増えるので、芸者も私達も気を付けたもんだ。生理休みもとらして貰えないんだよ。

大連はね、満州で訓練した兵隊さんが南方へ行き、内地から又、兵隊さんが上陸する玄関の港よ。それから満州の奥地や国境の町へ行くとお金になると言われ、お母さんにお金を送るために、兵隊さんと一緒に国境の町へ行くのよ。前借はどんな仕組みになっていたのか、今でも解からないが、働いても消えず増える仕組みなのよ。増えればまた前借、早く返したいと、お金になる国境の町へ行ったのよ。

私の体の上を大勢の兵隊さんが通っていったけど、その数は思い出せないほどだったね。あんたはどう思うか知らないが、私達は商売だけで寝たんじゃないよ。お国のために戦う兵隊さんに、さあおいでよ、ここで元気を出して、しっかり戦って死なないでおくれよ。と。私達も一緒に戦っている気持ちだったんだよ。判ってくれるかい。あんたなら判るよね。増田さんが言っていたよ、あんたは慰安婦の経験がないんだと、私は嘘と思ったが、増田さんが本当だと言うので、私も信じるよ。戦友は有り難いね。あいつは別だ、人の痛みも判る奴だとも言っていたよ。だから話にきたのよ。

私達は日本人だから一級品にされてね。笑っちゃうよ。下士官や将校用。兵隊はね、軍需工場で働くとかなんとか言って集めた朝鮮の女よ。働く建物も悪く裏通りだったよ。一日に五十何人か相手にされてひどい熱で、狂って死んだけど、可哀想だったね。私達は自由だったけど、朝鮮の人はね、見張りがいて逃げることも出来ないのよ。ね。騙して連れてきたんだから。

ソ連が攻めてきたとき、私を妹のような顔だと言っていた軍曹さんが、駆けつけてきて、早く逃げろとハルピンまで行けるようにしてくれたのよ。あの親切な軍曹さん、生きているかね。きっとシベリアへ連れて行かれたと思うよ。

日本が負けて私の借金は棒引きさ、いったい私しゃ誰にお礼を言えばいいんだい。まったく。私しゃ『軍国の家』の娘だよ。

ハルピンの生活はひどかったね。思い出してもゾッとするよ。あれが地獄だね。楡(にれ)やアカシアの並木は美しかったけど、日本人は地獄だった。方々から避難してきた人が、学校や大きな建物に一杯で身動きが出来ないぐらい。夏だから死体が腐って臭うしね。建物の隅や裏通りには、痩(や)せ細った死体がごろごろ転がっていてね。電気はないし真暗な中で衰弱して動けない人が、のたうちまわるのよ。人買いが五歳の男の子を探しているのよ。知ってる？よそうね。

アッという間に冬が来てね。夏服に満州の冬がきたんだよ。着るものがなくてね、破れた麻袋を体に巻いて震えながら石炭拾いをするのよ。そうそう十ぐらいの姉が三つか四つの妹をかばうようにして、何かをすすっているのよ、みなし児なんだよ。それだのに何もしてやれないのが情けないやら、口惜しいやら、神様や仏様が憎らしくなって泣いたよ。みんな必死で銃後を守ったのに、

救ってくれる者はいないんだよ。外地の戦争犠牲者ほど哀れな者はないよ。

そんなとき、とんでもない話が持ち込まれたのよ。引揚げの面倒を見るために出来た団体の幹部が、なんと言ったと思う。「ソ連軍が女を出せと言ってきた、命令に背(そむ)いたら帰れない。みんなが生きて帰れるためだから行け。」なんで私達に目を付けるのよ。バカッ、アホウ体は汚れていても、心は美しいんだ。とぼけたこと言うな。すると今度は、土下座(どげざ)して頼みます、お願いしますの一点張りよ。子どもを連れた母親を見て、この子のお母さんを赤鬼どもの餌食(えじき)にはさせんぞと、あきらめるのさ、この気持ち判るかい。お国のために戦う兵隊さんのお役に立つと言われてなったんだよ。今度はおんなじ女のために赤鬼に身をまかせるのさ、男には判るまいね。涙も涸れてしまってね。

今晩は何人と幹部が言うのよ。お願いも、頼むも言わないのよ。もうその顔は女衒(ぜげん)（遊女奉公をさせるための世話役）の顔よ。いやいや立ち上がるとお母さん達が手を合わせて、拝んで、私達を見送るのよ。おや、あんた泣いてい

るのかい。いや、泣いてくれたんだね。私しゃ最初ここへ来るのに気が進まなかったのよ。でも来てよかったよ。あんたに逢えたんだから。ありがとう。

……握り合った手に二人の涙が落ちる……

葫蘆島から船で日本に帰ったんだが、ハルピンから船に乗るまでの間がまた大変なのよ。道中や船を待つ間にも、幹部は私達を人身御供にさせるのよ。傷ついた女を犠牲にして平気なんだよ。私達の傷ついた心に慰めの言葉ひとつかけず、当然かのように振る舞うのさ。ほんまに満州ゴロ〔満州にいたごろつき・暴力団〕の女衒だよ、日本の男は。

女や子どもを守らず、女を日本へ帰れる道中手形〔関所を通るための証書〕にしたんだよ。：絶句：やっと船に乗れたのよ、これがまた大変なんだよ。女は絶対忘れないよ。船の中でも次々死ぬんだよ。赤ちゃんや子どもが死ぬと、気が狂ったように泣きわめくお母さん。お母さんも放心して幽霊のようになって衰弱して死ぬ。死ぬとね。水葬だかなんだか知らないが海に投げ込むのよ。

次々にだよ。するとまた気が狂って死ぬ。死ぬのは女と子どもと赤ちゃんよ。大人の男は死なないね。女に助けられてここまで来たことや、船に乗れたことも忘れているのよ。そう、あの男達は今でも憎い。……絶句しばらく沈黙……

九州に上陸して解散式があったのよ、幹部はなんと言ったと思う。「ご苦労をかけました。いろいろありましたが、あの時はしかたがなかった。自分は最善を尽くして皆さんを日本へ連れて帰ることが出来ました。」と、私達には見向きもしないのよ。幹部と握手して喜んでいるのは男だけよ。女を犠牲にして最善もくそもあるものか。それが男よ、あんたなら判るね。馬鹿野郎と思っていたら、お母さん達が私達を取り巻いてお礼を言ってくれたのよ。そうお母さん達は自分と同じ女の『性』に助けられたことを知っているのよ。

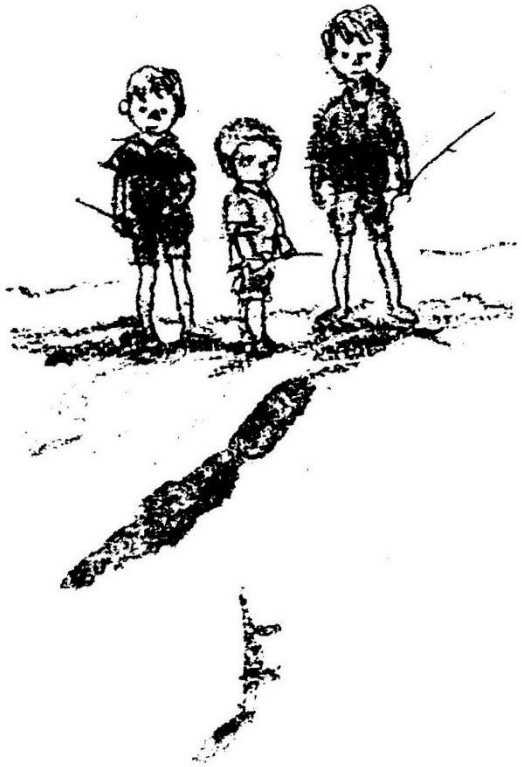
幹部が私の記憶の中にある限り、私の戦後は終わらないんだよ。政治家や偉い人が、もう戦後ではないと言っているが、そんな立派な人達に言ってやりたいよ。あんた達、どんな辛い目に合ったのと。……泣いて手が震えている……

こんな思いはもうたくさん、あんたも、女、子どもを二度とこんな目に合わせないようにしっかりしておくれ。男はね、忘れようとしているのよ。あの時代はああするしか仕方なかったと、過去のせいにするのよ。女は違うよ、子どもを生んで育てているのだから。あんた知ってる、満州にいた日本の民間の男を、日の丸、君が代が満州を占領していたのよ。てっとり早い話が日の丸に守られて、日本人が優秀で中国人や朝鮮人を馬鹿にしていたのよ。日の丸に逆らうとひどい目に合うからおとなしくしている。それをお友達とか仲良しと思いこんで威張っていたのよ。満州ゴロは今でも言うのよ、あの頃は良かったと、あったり前じゃない、親分日の丸に逆らうと七三一行きよ。

嫌になるよね。「あの頃は仕方がなたった。そんな時代だった。」なんて言って片付けるなよ。「なんでそうなったのか」を考えて、語り継いでほしいよ。かしこぶって、知らないくせに「時代が時代だった」なんて言われるとヘドがでてしらけるよ。

アア利口ぶった男の話でしらけたね。増田さんを呼んで飲み直そうか。あんた増田さん呼んでおいでよ。あら目が真赤、寝不足かい。ハッハッ泣いてくれていたんだね。仕方がない、私が呼びに行くから……。

※七三一＝皇民化政策を批判する中国、朝鮮人を生体実験した所。



天神山は戦争を覚えている

藤島繁博

今年の有松天満社春季祭礼は三月十九日（日）に行なわれました。朝から好天に恵まれ、元日以来久し振りに出かけてみました。

境内は大勢の小学生や子ども連れで賑わい、出店と売っている品数の多さにびっくりしました。

太平洋戦争中の昭和十九・二十年の頃と比べれば雲泥の差を感じました。昭和十九年の秋祭には、せいぜい氷水やミカン水（炭酸抜きのラムネのような飲み物）が数カ所で売られているだけでした。翌年の春祭は縁故疎開中であったため、その模様を知ることはできませんでした。

当時子どもにとって祭りは大きな楽しみで、正月以上にその日の来るのが待ち遠しかったものです。その頃この天満社の山や、その周辺で遊んだことと、暮らしのほんの一部を三つご紹介します。

（一）天神山は丸はだか

有松・鳴海町にまたがる氏神さんの天満社は、境内入口から頂上の本殿まで、大木や雑木が茂っていました。

B二九による連日の空襲が激しくなって、終戦間近の頃は境内が教室となって、幾日か野外授業がありました。

終戦後二・三年間は、あらゆる物品が極度に不足し、煮炊きにも不自由となりました。燃料は薪（まき）や木炭も入手困難となり、関係者にお願いして樹木をいただくこととなりました。

おとな達は大木を切り、子ども等は枝をおろすことを手伝いました。

あれから五十年余を経て現在見る森に復元しました。平和が続いていることの証しです。

（二）タイル工場跡は格好の遊び場

いま天満社東側石垣沿いに坂道があり、その東方には住宅が連なっています。

戦前、坂道の途中にかなり大きなタイル工場があり、大変景気が良かったようです。

手越川にかかる参道の石橋（虹橋）の隣りに専用の土橋があり、完成したタイル製品の積出しや、原料の搬入にはトラックが使われていました。大型自動車に出合うことは珍らしいことでした。

終戦前後に工場は閉鎖され、工場は取りこわされました。窯場や不良品の廃棄場で、いろいろ形の異なったタイルを探すことができました。毎日巡ってきた紙芝居の、主人公をまねた遊びをしたのもこの場所でした。

（三）旧東分教場の変身

前記（二）の坂道を昇りつめ東方向へ進むと旧東分教場で、木造の校舎が校庭の奥の方に建っていました。戦中から平子に東分教場は移り、校舎は空になっていました。

敷地から桶狭間送信所のアンテナ用鉄塔がよく見えました。戦争中に数えき

れないほどの空襲警報発令のニュースと、終戦の日の玉音放送も、このアンテナから発せられました。

その送信所も、今は役目を終え、鉄塔も撤去されました。

旧東分教場は終戦後間もなくたってから、名古屋の中心部に進駐軍が多数集結していたため、ラジオ放送が必要となり、空校舎が放送所となりました。校庭内にアンテナが建ち電波が流れました。

時折ジープで職員が出入りするのも見かけました。モニターからの音声は、窓のすき間から洩れてきました。軽快な音楽が入っていたように思います。

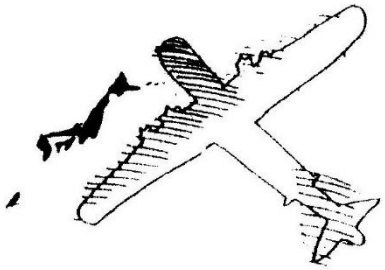
戦後三十年近くたって、現在の東陵中学校が誕生しました。校舎の一部と体育館あたりが東分教場の敷地であったようです。南西方向の境界杭のあたりで、ほんの少し当時を振り返ることができ、昔は随分高台にあったという感を受けます。

天神山の上空を西から東へ昼夜を分たず何百、何千機のB二九が通過したでありましょうか。

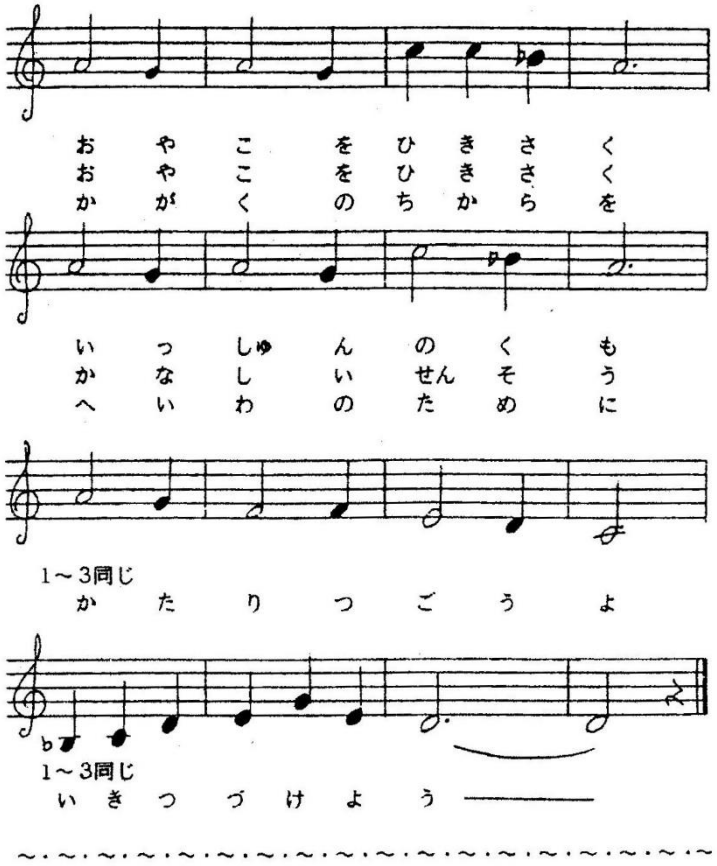
幸いにしてこの周辺部は、最小限の被害で終戦となりました。

この時期と同じつらかった暮しは二度としたくありません。

二〇〇〇年代を迎えた今日、毎夜大勢のツーリストを乗せた、名古屋空港発の大型ジェット機が飛び立ちます。主翼、尾翼のパイロットランプを点滅させながら、機体のあとを追って大きな爆音がついて行くのを、静かに天神山は見送っています。



完



ごめんなさい お母さん

子どもたちと
歌いたいうた・歌詞

一

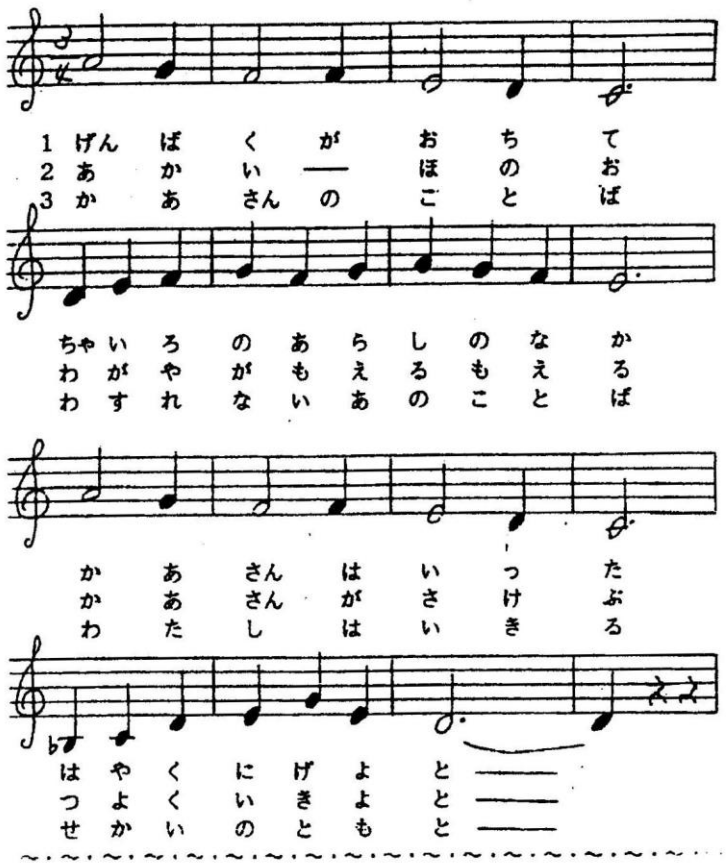
原爆が落ちて
茶色の嵐の中
母さんは言った
早く逃げよと
親子を引き裂
一瞬の雲
語り継ごうよ
生き続けよう

戦争体験の歌

作詞「戦争体験を語り継ぐ会」

《ごめんなさいお母さん》

作曲 坂手 尚子



二

赤い炎
我が家が燃える燃える
母さんが叫ぶ
強く生きよと
親子を引き裂く
悲しい戦争
語り継ごうよ
生き続けよう

三

母さんの言葉
忘れないあの言葉
私は生きる
世界の友と
科学の力を
平和のために
語り継ごうよ
生き続けよう

◇編集後記◇

緑生涯学習センターでの「戦争体験を語り継ぐ集い」は今年で十二回目になります。

この集いの際にお渡ししてきた「緑区民の戦時体験記録集」も、この第七集からは「緑区民の」冠をはずし、「戦時体験記録集」として出発することになりました。

この地球上では、ほとんどの人が戦争を好まないにも拘わらず、ごく一部の限られた為政者によって、現在でも地球上のあちこちで戦争が続いています。被害を受けるのは常に若者、婦人、子どもです。

現在の日本の平和がどんなに有り難いものかは、毎日の暮らしの中でおわかりの事とは思いますが、今一度この文集をお読みいただいて、改めて平和の尊さ、有り難さを実感して下さるよう願って止みません。

皆様のご家庭での、平和に対するご関心に少しでもお役に立つことができれば幸いです。

編集者一同

戦時体験記録集（第七集）

編集・印刷・発行……戦争体験を語り継ぐ会

発行年月日……二〇〇〇年七月八日（土）

発行部数……百五〇部

志出づる国

お札の顔は語る

10

伝え続けたい『わが師』

その女子大生は「今晩、これ読める」と、喜々として胸に抱き、都内の会社社長、深田秀明さん（七四）の事務室を出て行ったそうだ。五千円。千冊近い。自費出版から十数年たつのに、今なお月に二、三冊は売れる。書名は「井上成美」。ある海軍将官の伝記である。

わたし福沢諭吉は、ご存じの通り慶応義塾を開いた。聞けば、この伝記の人物も、むしろ「教育者」だったという人がある。

¥　¥

昭和十七（一九四二）年、広島・江田島の海軍兵学校の生徒だった深田さんは、新校長の名を聞いて鼻白んだ。イノウエセイビ？　「またも負けたか四艦隊」と嘲られた艦隊の、戦下手の司令長官じゃないか。

命は二、三年持てばいい、と思っていた。新校長が、訓話で、礼装のカフスの汚れに注意せよ、などと言うのを聞いて（下らんことを）と思ったものだ。敵性語というのに英語を重んじ、生徒の英和辞典を全部、英英辞典に換えてしまった。

生徒たちは知らなかった。

校長が海軍省の枢要ポストにいた時分、対米開戦につながる動きに猛反対し、右翼や陸軍の脅しにも引かなかったことを。

兵学校長の時は「年限短縮で軍人を促成せよ」との中央の要請を「私の理念はジェントルマンを育てること」と突っぱねた。次官に就任、本省に戻ると、終戦工作に。まだ十九年夏。公になれば命のない時世だった。

戦後、元校長を訪ねるようになって、深田さんは実像を理解する。徐々に傾倒し、ついには身辺の面倒までみた。元校長のすべてを残したかったから、微妙な女性の話まで聞き出そうとし、たしなめられもした。

五十年に亡くなると、伝記づくりに乗り出す。「きれいごとの伝記など作らん」と、四百数十人に取材。五十七年、兵学校の各期と語らって出版にこぎつけたのが「井上成美」である。

謹厳に過ぎ「水清ければ魚すまず」とも評されたが、あの時代に職も命も賭して正気を貫いた人だったことに疑いはない。

だが、それ以上に深田さんを揺さぶったのは、その個人としての〝戦争処理〟だった。

神奈川の漁村に隠棲した。近所の子に英語を教えながら、心付けや援助のほとんどを拒み、貧窮の中で生きた。

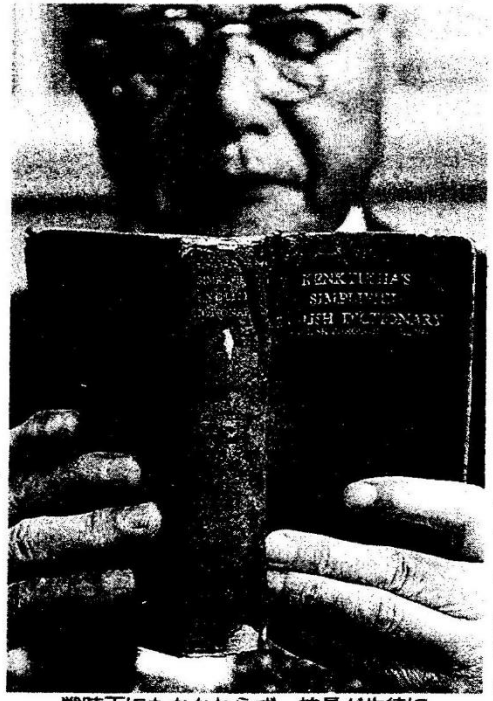
二十年春「早く戦をやめましょう。一日遅れれば何千何万の国民が無駄死にする」と連日、海相を説得したのは、当時の井上次官。なのに、深田さんの前で「遅すぎた。私の力足らず」と、なお、自分を責めた。

¥　¥

深田さんら七十三期生徒は十九年三月二十二日、兵学校を卒業。「お別れをしてこい」と帰省を許された後の四月二日、そろって昭和天皇に拝謁した。

ふんどしから何からすべて洗濯した物を、当日の朝、身に着けた。「千草の間」に、やがて、陛下のお出まし。様子をうかがって、思わず（無礼な…）と心中、言葉がもれた。陛下のほおを無精ひげが覆っていた。そして「お言葉」さえなく。

（われらは死地に赴くというのに…）。無念だった。



戦時下にもかかわらず、校長が生徒に使わせた英英辞典。その見識を教え子はあらためてかみしめる＝東京都内で

ともに並んだ同期約九百人。その日からわずか四十日足らずで、最初の命が散る。一年四カ月で三百人近くが戦死。皆、二十歳そこそこの若さだった。

深田さんは、終戦後、八月十五日正午の靖国参拝を欠かしたことはない。時の首相の初の公式参拝に重なり、警備に「遠慮するように」と言われた時も「今ごろ来て、何だ！」。制止を無視して、玉砂利を踏んだ。

お国のために死んでいった仲間への「後ろめたさ」と、元校長の身の処し方、そして、あの拝謁の日の記憶―。心で重なる度に、こう問うている。

（なぜ、陛下は、せめて一言の謝罪でもされなかったのか）

¥　¥

今や政も官も財も、トップの責任逃れなど当たり前の時世。だからこそ「井上成美」を伝え、知ってほしいと深田さんは思う。私、福沢も「痩我慢の説」に書いた。「成敗ともに責めに任じてけっしてこれを遁るべからず」と。もう伝記の在庫は百二十部ほど。だが、なくなったら、また増刷する。今度は十四版になる。

ご意見お寄せください

この連載のご意見、ご感想をお寄せください。氏名、連絡先などを書き添え、〒460 8511 中日新聞社会部「志出づる国」取材班まで。ファクス052（201）4331。Eメール shakai@chunichi.co.jp。